

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 12



2014 春

目次

春の闇	信里由美子	28
お正月	名木田純子	26
舞	長尾京子	24
草紅葉	鳥越 棼	22
試歩愉し	富阪宏己	20
日記買ふ	谷口利子	18
春	高城登代	16
冬落暉	角南房子	14
落葉	桜本滋子	12
今年の春	大戸 稔	10
酒とビールと焼酎と	梅田光憲	8
冬	植田桂之	6
一日	井上悦男	4
蟬の穴	石井宏幸	2
流れる	蓮岡健美	30
うたかた	真木好子	32
眺むれば	三宅 進	34
青藁	山下祐子	36
古希を迎えて	與田武彦	38
浜辺の四季	米元ひとみ	40
産土	渡辺牛二	42
千日の約束	富阪宏己	44
尾道	石井宏幸	47
編集後記	渡辺牛二	48

蟬の穴

石井宏幸

スケートを履き風となるばねとなる

まだ固き未来組み上げ冬木の芽

時雨へと傘の昏さを開きけり

落椿おのが昨日と重なりぬ

地下街へ色を持ち込むチューリップ

草笛の空が繋いでゐる故郷

力抜き海月の意思の裏返る

ででむしの別の時間に迷ひ込む

陰動き出して目高の目なりけり

蟬の穴開きたる夜々を誰も知らず

一日

井上悦男

図書館を出て北風の子となりぬ

冬芽たつ木立の続く中を行く

水底の冬日を砕き風奔る

凍雲の右と左にある日差し

街灯のひとつ消えゐる夜寒かな

人影の映らぬ玻璃戸冬の街

西口を出でて暖簾や温め酒

冬の月ナイフは蒼く光りけり

何時もより隣の遠き冬灯

大きくさめひとつなんにもない一日

冬

植田桂之

浮子を見てまた空仰ぐ秋日和

裂け目より種こぼれさう石榴の実

冬隣ゆつくり動く鯉の鱗

石菘の花枯山水の庭灯す

色褪せしポスター濡らし初時雨

逆らはず風と戯る冬木立

熊野古道冬日に洩るる杉木立

さざ波を枕に鴨の浮寝かな

コンビニの灯の皓皓と冴え冴えと

雨滲む土塊黒く春めける

酒とビールと焼酎と 梅田光憲

居酒屋の目刺はどれも左向き

花見酒すぐ腰ぬかす紙コップ

のどぼとけ天に突出し生ビール

焼酎も夏の季語とや水割す

女将出て下津井節や秋澄めり

酒たばこ絶ちし男の秋祭

濁酒うわさに尾鰭付け放つ

取り敢へずでびら三枚爛ぬるく

人もまた○△□おでん酒

熱爛や今夜は棉になるつもり

今年の春

大戸 稔

大鳥居潜る幸せ今年の春

湍水地藏当子新らし年明くる

チェンソーの響く竹林初仕事

山裾の十三観音滴れり

あの世にもこの世の花を千代子逝く

虫しぐれ逝きし義姉を引き戻す

ひとつ増え夜の目薬左千夫の忌

汚れなき笥の水や文化の日

南五味子友の正客引き立てし

数へ日や全霊込めて打ち納む

落葉

桜本滋子

落葉踏む音の輪唱とめどなく

神の道仏の道と落葉踏み

縄文の埋蔵林の落葉かな

落葉して石点々と鶴の墓

誰かあと追ひかけてくる風落葉

住職の話す手止めず落葉搔く

掃く前に風の奪ひし落葉かな

風まわる落葉の廻る城の道

いろいろな落葉を踏みて過去を踏む

百閒碑落葉に猫のうづくまる

冬落暉

角南房子

響き合ふ色となりけり溪紅葉

千年てふ樹齡の幹や秋惜しむ

古本屋閉ぢて黄落しきりなる

枯菊の暮色を集め束ねられ

鶇舞ふ冬の銀波を光りつつ

山眠る寢息とも聞く風の音

歳月の深き折り目や冬帽子

指先を言葉に変へて冬ぬくし

目を入れて雪より白き雪うさぎ

一瞬のサイドミラーの冬落暉

春

高城登代

喜寿の春逃げざる覚悟定まりし
するすると春めきてゆく音の中
湖を抱き小白鳥舞ふ鄙の里
煮魚の端に置かれし梅二輪

猫の声やさしく聞こゆ初茜
あかつきに渾身の羽化蝶になる
小石落つ蝌蚪広がって逃げにけり
ヤッホーに鴉答へて山笑ふ
引き潮の子持鯊跳ね光りけり
父母の齢まだ越えもせず目刺焼く

日記買ふ

谷口利子

偽らぬ我に会ふため日記買ふ

成すことのありて生きたし寒灸

気力とは湧き出づるもの梅一輪

もの芽みな合掌のかたちして静か

天空へ背伸びの一枝芽吹きけり

春の土渦巻いてゐるゴムホース

たをやかや五十となりし子の雛

囀を入れて大樹の若返る

囀にわれも溶けあひ石に坐す

日向ぼこ極楽行きの舟にのる

試歩愉し

富阪宏己

試歩愉し紅葉の道を行く時は
柿の木の裸となりて高かりき
大綿のひとかたまりとなりし日矢
一枚の残る枯葉の吹かれつつ

寒風の荒磯の底透き通る

冬鳥の啼けば竹やぶ青ざめん

冬晴を映して水の動かざる

山寺の賽銭箱に餅二つ

山道の疎林密林日脚伸ぶ

しみじみと大寒の夜と思ひけり

草紅葉

鳥越 梵

広々と八幡平の草紅葉

芭蕉像触れてさやけし中尊寺

秋冷や金色堂に畏みぬ

秋天や蔵王お釜の色深く

稲田あり魯田もあり米どころ

甌穴に深く水澄む巖美溪

断崖の黒き岩肌薄紅葉

遊覧の船路秋潮荒るゝまゝ

秋の浜音百選の波を聴く

河童橋渡る遠野の水澄みて

舞

長尾京子

新春の空高々と鶴の舞ふ

言祝の声高らかに初鴉

蓬菜を飾りて皆に笑顔かな

厨房の後姿や嫁が君

袂あげ磴のぼりゆく春著の子

人溢れバスも溢るる福詣

七草と真つ青な空どこまでも

七草や畦道ゆきて風抜けて

左義長の吸ひ上げらるる灰の花

寒卵色鮮やかに飛び出せり

お正月

名木田純子

水平線離れて円き初日かな

ふるさとの祝ひ歌より初稽古

手から手へ独楽飛んでをり生きてをり

買初やすこし贅沢してみたく

初旅や海より仰ぐ富士の山

産土の巫女より屠蘇と若さ受く

初鶏や声高々と明けを告ぐ

初諷経もるる本堂拝しけり

初糴の声も上擦るご祝儀値

襟足に光差し込む春著かな

春の闇

信里由美子

初桜生れし風なり日射なり

初花や神の定めしところより

初花の生れてはや持つ静寂かな

ひとひらの言葉となりて花の散る

散る花の風に無心でありにけり

花の昼風に散りゆくしづ心

花吹雪けふの一会の風に佇つ

みよし野の宿出でしより春の闇

春の闇蒼き靄より谿の音

灯を消せば西行の闇春の闇

流れる

蓮岡健美

桜鯛鎧の如き鱗剥ぐ

透き通る翳りなき腹鱔を割る

一匹の甘えたる蚊にまとはるる

汗ふきの重たきを持って汗を拭く

涼み台ありしか闇の話し声

夜の更けて降る雨音や冬近し

短日を急かせて午後の雲厚し

冬雲の影を落すや山の峰

含みてはとろりと落つる酔牡蠣かな

香り立つ墨の流るる賀状読む

うたかた

真木好子

ありなしの風にさ揺らぐねこじやらし

いつせいに流れを上るあめんぼう

あるときは己がじしなりあめんぼう

近道は一方通行赤まんま

かくれんぼしてゐるやうなゴーヤの実

天変の世を惑ひなく彼岸花

鈴虫の声のよどめる雨夜かな

さねかずら花高々と咲きにけり

見守られ来しこと数多実南天

しんしんと冬深めゆく夜のしじま

眺むれば

三宅 進

眺むれば心休まる菊花展

冬に入り溪谷の景日々変化

早きもの葉牡丹の時季到来す

川の瀬に何を語るか鴨の群

七草の菜を混ぜながら啜る粥

風に揺れ枝垂柳の芽吹きかな

我が庭の主となりたる藪椿

囀や見上ぐる枝に鳥一羽

向日葵に埋め尽くされし干拓地

沙羅の花散り行く姿憐れなり

青藁

山下祐子

梅檀の花の奥なる札所かな

岩割りてその夏萩の可憐さよ

雨音が瀬音消したる夏座敷

湯めぐりや瀬音親しむ籠枕

淋しさは水からくりのしまひかな

秋草を帯にも咲かせ嵯峨野行

葛の葉をはらひつ一両列車かな

冬蜂や案内板の真ん中に

山の端は墨画の如し冬の雨

青藁の香ももろともに注連作る

古希を迎えて

與田武彦

入梅や時を重ねて古希となる

源平の能の響や夏つばき

雨上り涼みながらの散歩かな

石垣に南瓜の実を付けにけり

散歩道飛蝗が先に案内す

瀬戸の海港の風が秋運ぶ

見上ぐれば岩の上にも秋の雲

山里に造り酒屋や返り花

雲の影海に映りし枯芒

日が暮れて迎への車寒椿

浜辺の四季

米元ひとみ

しろがねをのべ初風の瀬戸の海
ときをりの大きな波に風光る

桜貝壇の中なる砂浜に

春光へ鷗は羽を任せたり

フライパン持て夕風に対峙せり

浜の火も沖の灯しも夏の果

浜に見る空のひろさよ流れ星

夕日みて橋の灯をみて文化の日

海光にまぎれてみたり返り花

列車ゆく冬青空と海にあひ

産土

渡辺牛二

夏暁の豊かにきうり刻む音

涼風のその一閃にする吐息

半ズボン足に齡の見え隠れ

会釈して案山子リアルでありにけり

蛇出づと言はれ遠のく父母の墓

夏草や境わからぬ村の墓地

かなかなや山にも海のあるやうな

威銃寂しかりけり遠ければ

天井の節目親しき昼寝覚

産土の山また山の晩夏光

千日の約束

富阪宏己

「千日の約束」という、韓国ドラマを見たいと思っている。

これは、若年性アルツハイマー病を患った働き盛りの女性が主人公のドラマらしい。

私の脳梗塞が落ち着いたら、どこかで、レンタルビデオを探すことにしている。

考えてみると、確実に痴呆に向かっていく病気にかかったことを知ると、それは恐ろしい事だ。千日の約束の千日の意味は分からないが、千日経つと痴呆になるのだったら。

考えると、ゾツとする。

こんなことを考えるようになったのは、私が脳梗塞を患ったからである。

最初は五〇歳の頃だった。職場で脳ドックを受けると、低吸収域と呼ばれる

白い梗塞部分が見られた。

何ら、自覚症状はなく、血圧も、コレステロール値も正常であった。

私は当然のように無視した。

二度目は六〇歳の頃であった。

これは右手がダラリと麻痺してしまったのだ。まったく知覚がなかった。

T大病院へ緊急入院した。

一週間、点滴で血管内を洗い尽くした。

三週間ほどで、麻痺は嘘のように消失した。

私は神経の圧迫による麻痺だと思っていたが、MRIは脳梗塞である事を語り尽くしているのだった。

しかし、この時も血圧、コレステロール値等々、何ら異常は見られなかった。

タバコはやめなかったし、処方されたアスピリン系の薬も吞まなかった。

それから一〇年、またもや脳梗塞にかかった。

今回は本格的といえる。

といっても、ラクナ梗塞で意識障害はなく、ただ呂律が回らなくなり、右半身に異常を感じただけであった。

しかし、二、三週間で症状の改善は見られなく、半年近く経った今でも、わずかに言語障害が残っている。

何よりも、まだらボケ（まだら認知症）を疑っている。

脳梗塞の場合、入院すると即座にリハビリが施される。

運動療法や作業療法や言語の訓練や、毎日、繰り返しされる。

しかし、認知症のリハビリはない。

幾人かの医師に何度も、「私はまだらボケではないかと」訴えたが、一笑に付すか、「気にすることはないですよ」と、取り合ってくれない。

けれど、私はまだらボケを疑ってやまない。

この頃である。

「千日の約束」という韓国ドラマを見なくなったのは。

若年性アルツハイマーを扱ったものでは、韓国映画「私の頭の中の消しゴム」は見たことがあるし、日本映画「君が僕を忘れても」もあるのだが、千日の約束の千日が気にかかるのだ。

それは、滝壺に向かって流れてゆくように、確実に精神が死へと向かう過程なのだ。

三度も脳梗塞にかかれれば、もう後がないと考えるのが順当だ。

考えてみれば、私の年になれば、いつ死がやってきても不思議はないのだ。

ただ、千日とはつきり終わりを告げられてないだけだ。

この度、脳梗塞にかかり、ある意味良かったと思う。

流れに逆らわなければ、確実に滝壺に流されるこ

とを自覚できたのだから。
死を思うことがある。
死ぬと思ったとき、自然はなんと美しいことか。
風の匂い、日の光、味覚や聴覚や、なんと素敵な
ものに囲まれていることか。

雁やのこるものみな美しき

石田波郷

なのである。

今までは、ゴールを目指して闘ってきたが、こ
れからは忍び寄る死に対して闘い続ける季節なの
だ。

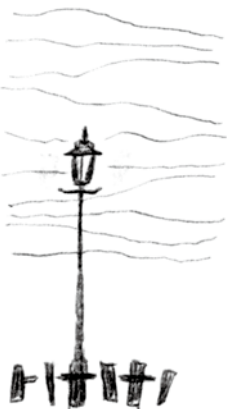
リハビリそのものが闘いであり悦びなのだ。

一歩一歩、大地を踏みしめ歩く事が、生きるこ
となのだ

試歩一歩一歩が愉し明の春

宏己

△了▽



尾道

石井宏幸

夕焼濃し芙美子の海を去らんとす

加藤三七子

林芙美子の「放浪記」は「海が見えた。」で始
まるが、掲句ではまさにその海を去ろうとするこ
ころ。夕焼が染め上げている尾道水道を芙美子の
海と呼び、眼前の海と小説の中の海を重ね合わせ
ており、その感慨が眼目となっている。作者は尾
道に遊び、千光寺や民家を縫うようにしてある坂
の上から、その水道を芙美子の海と思い眺めて過
ごしたのだ。

神が投げし瀬戸の島々けふの月

上村占魚

文学の小径の上の千光寺公園には展望台があ
り、瀬戸の島々を見渡すことが出来る。名月の下

では、その島影も神々しく見えるというのだが、
「投げし」という表現が、影が点在する様と、擬
人化による神の实在や神代の国造りの伝説を感じ
させる効果を生んでいて美しい。

私は高校時代を福山で過ごしたが、夜として
は、二三人の友人と花火大会に行った記憶がある
のみで、月光に沈む尾道沖の島影の美しさを知ら
ない。

この一月四日に、尾道まで妻と十八切符の旅を
し、西国寺、千光寺と巡り、展望台にも上がった。
やはり目の前には、松の内の光の中に、尾道水道
が、しまなみ街道で繋がれた島々が横たわってい
て、その水道を横目に去る三七子氏と、占魚氏の
詠った島々の夜を思った。

古民家の閻蔵す尾道の冬

造船の島動き出す注連の内

宏幸

編集後記

◆主宰入院の報で、アンソロジーの発行は無理だろうと、勝手に延期を決めていましたが、そんな中で早々と数名の方から原稿が届きました。◆とりあえず原稿のお礼と、発行が遅れる旨の連絡をさし上げましたが、皆様の中にアンソロジーが根付いていることが感じられて、本当にうれしく思いました。

◆主宰が句会に復帰されたのは年末の二十六日でしたが、早速アンソロジーのお話がありました。

◆それならば規模は小さくても、とスタートした今号ですが、多くの方に参加していただき、こうして発行する事ができました。

◆主宰、編集部一同に代わりましてお礼申し上げます。

◆毎日見て通る道端の家庭菜園が羨ましくなつて、庭に春キャベツの苗を三本だけ植えました。昨年の冬初めの頃です。

◆県北の冬を越せるのかと心配しましたが、大丈夫でした。

◆霜の朝は葉は萎れ、色もくすんで見るも無残な姿ですが、じつと耐えているんですね。

お昼頃には元の鮮やかな緑に戻り、葉をもたげてくれます。

◆毎日がこの繰り返しです。その中で少しずつ成長するんですね。今では中のほうに巻き始めそうな芽が見えています。

◆これからが大変なのでしょうが、毎日ささやかな元気を貰っています。

立春や卵産んだと鶏の声

(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.12

平成 26 年 4 月 1 日 発行
発行 合歓の会
発行責任者 富阪宏己
印刷 弘文社
岡山県津山市川崎 168

連絡先
〒701-0304
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
富阪宏己方

次号締め切り
平成 26 年 9 月 3 0 日
原稿送付先
〒708-0015
岡山県津山市神戸 719-7
渡辺牛二
Email : info@nemunokai.net
Tel. : 090-8710-7067

平成二十六年四月一日発行 第十二号